



やり抜く力 ～自分が持っている可能性を信じて～

校長 土屋 智樹

「やり抜く力」と聞いて、皆さんはどんなことを思い浮かべるでしょうか。「努力すること」「最後まであきらめない」といったことを連想する人が多いと思います。私は小学生の時からバスケットボールに取り組んでいましたが、当時の指導者からは、「困難なことも気合と根性でやり抜け」などとよく言われたものでした。

「やり抜く力」と同義語として、ペンシルベニア大学教授のアンジェラ・リー・ダックワース氏が提唱した grit (グリット) があります。ダックワース氏は、「生まれ持った才能やIQ、学歴ではなく、個人のやり抜く力こそが、社会的に成功を収める最も重要な要素である」として、グリット理論を提唱しました。グリットは、以下の4つの要素から成り立ち、それぞれの頭文字をとって「grit」になります。

- ① Guts (ガッツ) : 困難なことにも立ち向かう度胸
- ② Resilience (レジリエンス) : 苦境にもめげずに立ち直る復元力
- ③ Initiative (イニシアチブ) : 自ら目標を見つけて取り組む自発性
- ④ Tenacity (テナシティ) : 最後までやり遂げる執念

つまり、グリットとは、困難な状況でもめげることなく、自ら目標に向かって最後までやり遂げる力のことです。実は、10月25日(金) 大戸小学校で行われた親善バスケットボール大会で、6年生の子どもたちが、この力を大いに発揮してくれました。

クラス対抗で2試合行われましたが、特に、第2試合の子どもたちの奮闘がとても印象に残りました。試合の序盤は、南小、大戸小の両者とも緊張してなかなか得点できないでいましたが、徐々に大戸小が得点を重ね、12対0と最大12点差までリードを許しました。この劣勢を跳ね返そうと、担任の先生が必死に大きな声を出して子どもたちを鼓舞しようとしていますが、私には、相手の気迫に子どもたちが押されているように見えました。冷静に試合を見ていた私でしたが、いてもたってもいられなくなりました。「まだまだ、12点差だ。」「まずは、ディフェンスを頑張ろう。1つずつ返していこう。」と子どもたちに声を掛けました。

そして、ここから子どもたちが、底力を見せてくれました。体を張って球際に勝とうとする子どもたちが徐々に増えてきます。「相手から体を当てられて倒れてもあきらめない子」「コートの外に出ようとしたボールを追いかけてマイボールにする子」「何度もコートを往復して途中走れなくなっても、最後まで走り切ってシュートをブロックした子」など、全員の粘りのディフェンスから、驚異的な追い上げを見せてくれました。2点差までに迫り健闘しましたが、結局、試合に勝利することはできませんでした。しかし、子どもたちの間には、負けた悔しさよりも最後まであきらめずやり遂げた満足感が広がっていました。

私は、やり抜く力を発揮するには、その第一歩として自分が持っている可能性を信じるのが肝心だと思っています。最後まであきらめず、自分のできることをやり遂げて、相手に追いつき、追い越そうと戦っていた子どもたちが、今回それを証明してくれました。また、試合に出ていた子どもたちを必死に応援し、追い上げムードをつくってくれた第1試合の子どもたちの存在もとても大きかったと思います。

やり抜く力の鍵は、自分を信じる心、自己肯定感を育むこと。私たち教師は、今後も子どもたちの感性や人間性に対する肯定的な評価を行いながら子どもたちと対話を重ね、子どもたちのやり抜く力を育てていきたいと思っています。